次回の伊豆大島噴火に備える

東京大学地震研究所

森田 裕一



v -	レベル		山頂噴火:三原火 口からカルデラ内	山腹噴火:カルデラ 外側で居住地から遠い	山腹噴火:居住 地域に近い. 海岸線.		
	噴火警報	5	流出した溶岩が居住地域 に接近 噴石,火山灰,火砕流を 発生	カルデラ外で噴火発生	居住地域・海岸線付 近で浅い地震多発, 顕著な地殻変動		
	居住地域	4	カルデラ外に溶岩流出居 住地域方向に流下 (86/11/21) 山頂部で大規模な噴火	カルデラ外で浅い地震が多発,顕著な地殻変動			
	噴火警報火口近傍	3	三原山から溶岩が流出 (86/11/19?) カルデラ内・東側に流出 山頂直下浅部で地震多 発(87/5下旬)	\bullet 的, \bullet \bullet	部分が空)ままで良		
		2	連続微動(86/10/27) 噴気増大(86/11上旬) 山頂直下浅部で地震多 発(87/5下旬)	詳細いのか?			
		1	活火山であることに注意		火に対する知識・ の共有が重要		

噴火活動	噴火の発生		活動の衰退
1986年~ 1990年	1986/11/15 山頂噴火開始 11/19 火口から溶岩 流出 4日後に満杯 3000万トン	11/21 山腹噴火 5000万トン 全島避難 活動一旦低下 <2発目 帰島	1987/11/16- マグマ後退期噴 火(山頂火口底 陥没)
1950年~ 1951年	1950/7/16 山頂噴火開始 8/15 火口から溶岩流 出→ 1ヶ月後に満杯 9/21 活動低下 5000万トン 1発目	1951/2/4 活動再開 1951/4初旬 活動低下 <2発目	1951/6/6-30 火口底陥没 火山灰放出
1912年~ 1914年	1912/2/23 山頂噴火開始 7月末 活動低下 火口に 3ヶ月で満杯 にならず	1912/9/12 <2発目 第1期の 101日, 火口から溶 岩流出 1.5月後活動低下 火口底陥没	1914/5/15~31 マグマ後退期噴 火 火口底陥没

3回の噴火の共通点と相違点

共通点

最初の噴

何回かの

最後にマケ

⇒活動期

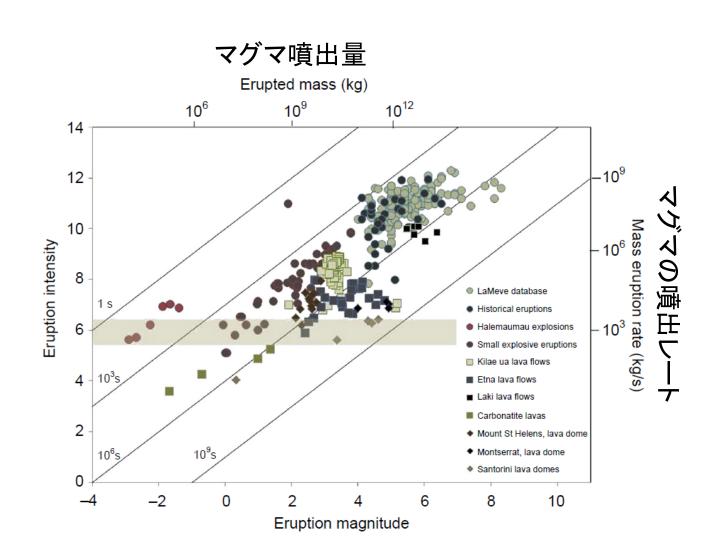
相違点

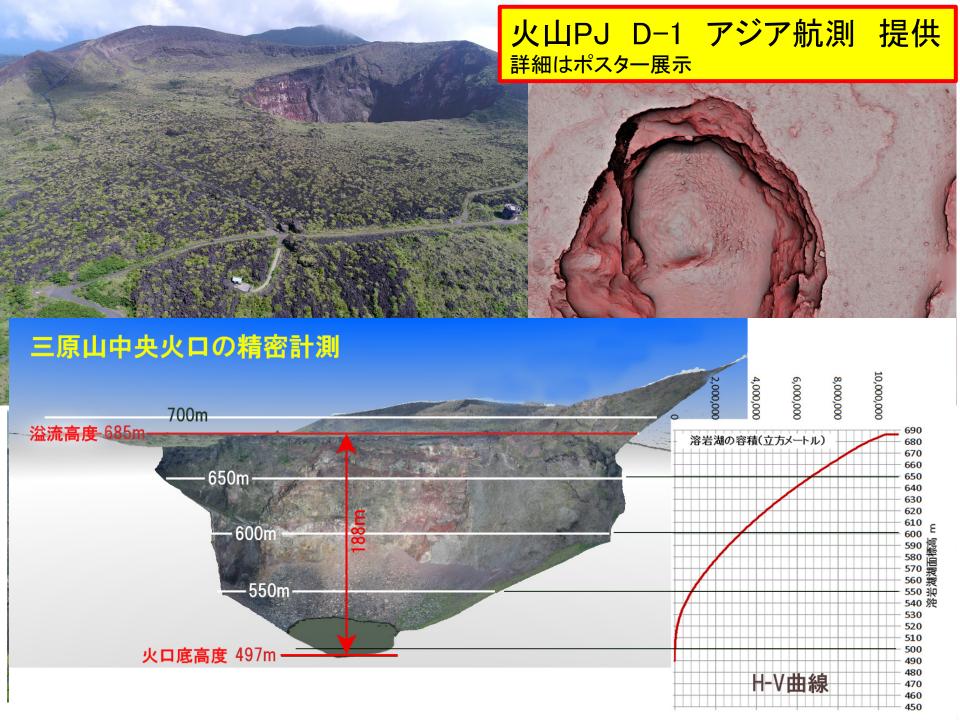
マグマ上昇

上昇率

マグマがリ

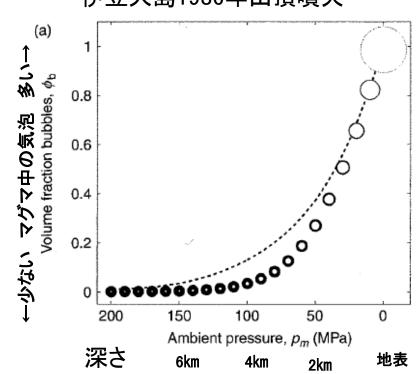
一連の活動中 穏やかな噴火

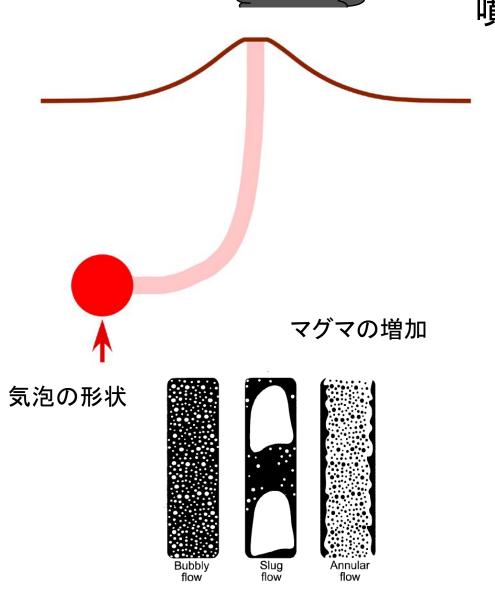




噴火の激しさ:揮発性成分

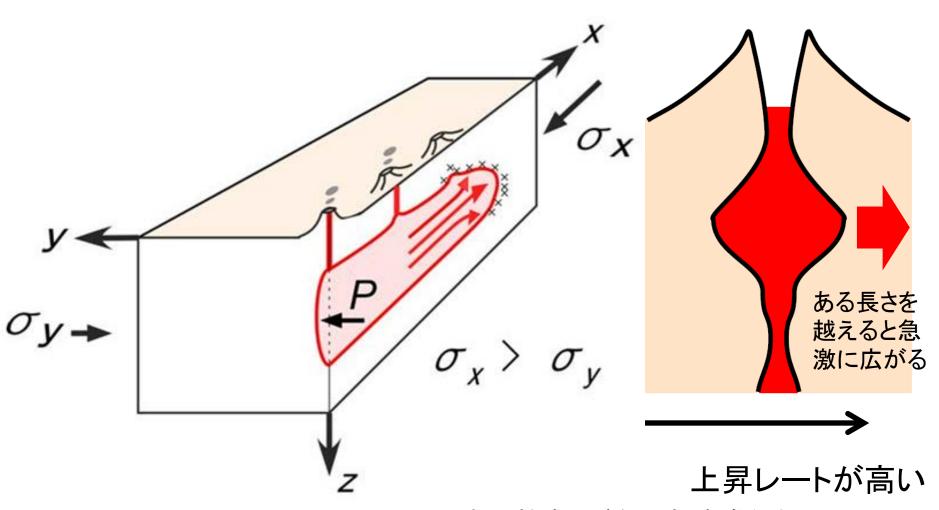






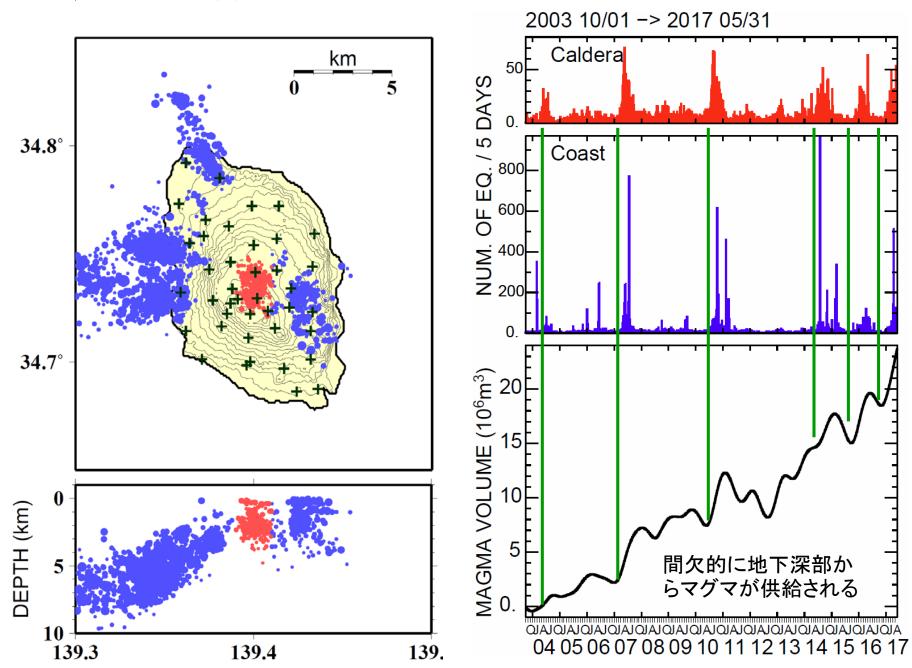
地下のマグマに含まれる揮発性成分 が重要⇒どうしたらそれが見えるか?

山頂噴火と割れ目噴火

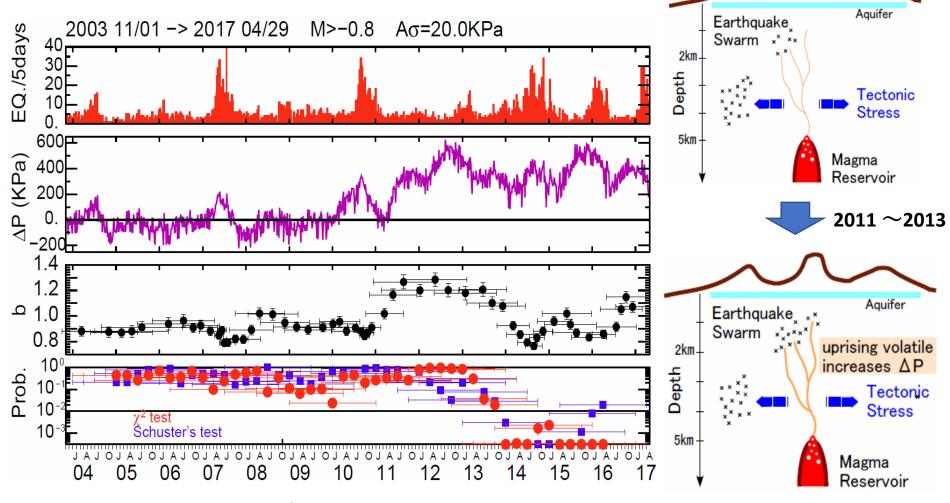


揮発性成分が多い時, 急激な膨張 でマグマが横に広がると岩脈を形 成し, 割れ目噴火に至る

地震活動で揮発成分の上昇を捉える



地震活動の変化



2011年以降: 地震活動が, 相対的に活発になった.

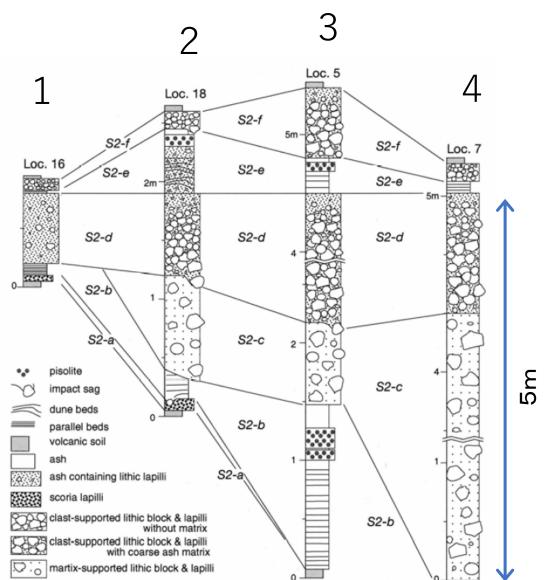
2013年以降: 震源域に極めて微弱な応力変化をもたらす潮汐に反応



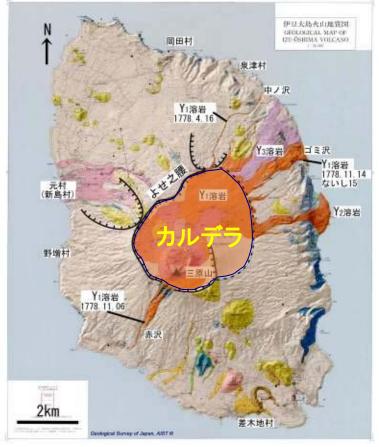
最近, マグマ溜まりは揮発性成分を多く放出するようになったのではないか. この後, 他の噴火前兆現象が現れると検証できる.

大きな噴火の規模を知っておく

約1700年前の噴火で、カルデラが形成された. その噴火では、火山灰等が5m程度積もった.







まとめ

- 伊豆大島火山は今は静かなであるが、精度の高い観測データを解析すると、次の噴火に向かって着実に準備をしていることがわかってきた。
- これからいくつかの現象が観測により捉えられることにより、一歩一歩噴火に近づく様子が明確にわかるであろう. それに合わせた早めの対応が望まれる. (社会構造の変化に呼応した対応)
- 良く判っているのは, 近年の噴火の様子のみ. 規模の大きな噴火の実態は必ずしもわかってい ない. 噴火警戒レベルの判定基準の曖昧さを減 らす努力(研究の推進)と曖昧さを前提とした対 応(行政判断)が必要.